

マルクスの隠れ家の背後へ

——資本主義の概念の拡張のために

ナンシー・フレイザー／竹田杏子訳

- 1 決定的特徴
- 2 基礎的条件
- 3 自然と権力
- 4 制度化された社会秩序
- 5 境界闘争
- 6 矛盾

資本主義が戻ってきた！この用語がマルクス学派の著作以外でめったに出くわさなくなってから何十年も経て、さまざまな筋のコメンテーターが今ではその持続可能性について公然と心配し、各学派の学者も体系的な資本主義批判を求めて苦心し、世界中の活動家はその動きに反対して運動している*。確かに、「資本主義」が戻ってきたことは歓迎すべき展開であり、現在の危機の深さについて体系的な説明が広く求められているとすれば、その明確なしるしであるといえる。資本主義に関する議論が兆候として示しているのは、(金融、経済、エコロジー、政治、社会等の)われわれを取り囲むさまざまな病が共通の根元にまで遡ることができるという直感の深まりであり、この病の基本構造に立ち向かわない改革は失敗するに違いないということである。同様に、このことばの再生が示しているのは、現代のさまざまな社会的闘争の繋がりを明確にし、反体制陣営の緊密な協力(完全な統一は不可能であるにしても)を可能にするような分析が、多くの領域で求められているということである。資本主義がそのような分析の中心概念となりうるという直感的射っている。

それにもかかわらず、資本主義について語る現在のブームの多くはレトリカルなままであり、本質的な貢献というよりも、体系的批判への渴望を示しているに過ぎない。何十年にもわたる社会的

【訳注】 本論文は、Nancy Fraser, “Behind Marx’s Hidden Abode : For an Expanded Conception of Capitalism”, *New Left Review*, 86, Mar/Apr., 2014, 55–72, の翻訳である。翻訳にあたっては竹田杏子が全訳し、本特集の企画者である原伸子が全体に目を通した。転載を快諾していただいた、Nancy Fraser氏 (New School for Social Research) と、版權の手続きをとっていただいた、New Left Review編集部、Rob Lucas氏に感謝いたします。

* 本論文の議論は、Rahael Jaeggiとの会話のなかで提起されたもので、われわれの*Crisis, Critique, Capitalism*, Polity Press (近刊) に収められる。研究助手のBlair Taylor, Centre for Gender Studies (Cambridge), Collège d’études mondiales, Forshungskolleg Humanwissenschaften, Centre for Advanced Studies ‘Justitia Amplificata’ の支援に感謝する。

記憶喪失によって、あらゆる世代の活動家や学者はKapitalkritik（資本批判）の伝統にまったく無知のまま、言説分析を器用に使いこなしてきた。かれらは、現在の状況を明確にするために、今日、それをどのように実践に移せばよいか、問い始めたばかりなのだ。反資本主義闘争の時代を経験したかれらの先輩は、指針を示してきたかもしれないが、かれら自身にも盲点がある。かれらの善意は明らかだが、フェミニズムやポスト・コロニアリズムやエコロジーの洞察を資本主義理解に系統立てて統合することにかれらは概して失敗してきた。

その結果、われわれは非常に厳しい資本主義の危機の渦中にいるのに、それを十分に明確にできる批判的理論を持ち合わせていない。確かに、今日の危機はわれわれが受け継いできた標準的なモデルには適合しない。今日の危機は複数の次元をもち、金融を含む表向きの経済だけでなく、地球温暖化や「ケアの不足」やさまざまなレベルの公的権力の空洞化などの「非経済的な」現象をも包含している。だが、われわれが受け継いできた危機のモデルは、経済的な側面のみに焦点を当て、他の要因から切り離して特別視している。同様に重要なことだが、今日の危機は新しい政治的配置と社会闘争の文法を生み出している。自然や社会的再生産や公的権力をめぐる闘争はこの配列の中心に位置するが、これは国民・人種・民族、宗教、セクシュアリティ、階級などの不平等のさまざまな軸があることを意味する。しかしながら、この点でもまたわれわれが受け継いできた理論的モデルは生産点における労働闘争を特別視しているので役に立たない。

つまり、一般的に、われわれは現代に相応しい資本主義とその危機の概念をもっていないのだ。本論文の目的は、この欠落を修正する道を提案することにある。この道はカール・マルクスの思想を先導とするが、わたしはこの目的を念頭においてマルクスの資本主義理解の再検討を提案する。マルクスの思想は多くの概念装置を提供するので大いに役に立ち、幅広い関心に原則として門戸を開いている。だが、マルクスの思想には、ジェンダーやエコロジーや政治権力を資本主義社会の構成原理や不平等の軸として体系的にとらえる考察が欠落している。社会的闘争の重要性や前提の考察もない。このような観点から、マルクスの洞察の最良部分を取り上げて再構築する必要がある。そこで本論文の方針として、まずマルクスを検討し、次いでかれの「背後に」あるものを探る。そうすれば、資本主義とは正確に言って何なのか、どうすれば適切に概念化できるのかといった古い問題に新たな光を当てることができよう。資本主義は経済システムや倫理的生活の一形態や制度化された社会秩序として考えるべきなのか。資本主義の危機的傾向をどのように特徴づけ、どこに位置付けるべきなのか。

1 決定的特徴

これらの疑問に答えるために、まず、マルクスが資本主義の核となる四つの特徴とみなしたものを思い出してみよう。私のアプローチは一見とてもオーソドックスに思われるだろうが、次のように「正攻法ではない方法」で試みようと思う。この四つの特徴がさらに他の特徴を前提としていて、この他の特徴こそ可能性の基礎的条件を構成するということを示したい。マルクスは資本主義の秘

密を見出すために、交換領域の背後にある生産という「隠れ家」を研究したが、私は生産領域の背後にさらに隠されている生産の可能性条件を探る。マルクスにとっては、一つめの資本主義の決定的特徴は生産手段の私的所有であるが、これは所有者と生産者の階級分裂を前提とする。この階級分裂は旧社会の解体から生じたものであるが、旧社会では人々の多くは、社会的地位の高低にかかわらず生存手段や生産手段を利用することができた。いいかえれば、労働市場を通さなくても衣食住や道具や土地や仕事を手に入れることができた社会であった。資本主義はこのような制度を完全にひっくり返した。資本主義は共有地を囲い込み、大多数の人々の慣習的な権利を廃止し、共有資源をごく少数の人々の私有財産に変えた。

このことは、マルクスが定義した二つめの中核的特徴である自由労働市場へと直接につながる。というのは、大多数の人々は、働いて生活し子どもの養育に必要なものを手に入れるために、非常に特殊でもってまわった方法をとらなければならないからである。この自由労働市場の制度は、いかに奇妙で「不自然」で歴史的に見て変則的で特異であるか、強調するに値する。この市場では、労働は二重の意味で「自由」である。まず、法律上の身分の点で自由であり、奴隷や農奴やその他の形で、特定の場所や主人に縛られることがない。それゆえに労働は流動的であり、労働契約に入ることも可能である。しかしふたつめに、土地や道具の慣習的な使用权を含む、生存手段と生産手段へのアクセスからも「自由」であり、労働市場へ参入しなくても済むような資源や権利を奪われるのである。

マルクスの三つめの核となる自己増殖する価値も、同じように風変わりでもってまわった方法である。資本主義が特異なのは、制度全体から発する物質的な推進力や方向性、つまり資本蓄積があるからである。つまり、原則として、資本家の「資格で」所有者がすることはすべて、自分の資本の拡大を狙ってのことである。かれらは生産者と同じように、制度全体から発する特異な衝動に支配される。人々がすべて各自の欲求を満たそうとする努力は間接的であり、欲求に優先する他の何かに縛られている。それは資本主義の非人格的なシステムに刻みこまれている最優先の至上命令であり、資本の終わりのない自己増殖への衝動である。この点でマルクスは素晴らしい。マルクスによれば、資本主義社会では資本そのものが大文字の主体になる。人間は資本の手先で、野獣を飼い慣らして欲しいものを手に入れるためにはどうしたらよいか、資本によって人間は考えさせられるのだということになる。

四つめの特徴は、資本主義における市場に特有の役割を明示するものである。市場は人間の歴史を通して、非資本主義社会でも存在していた。しかし、資本主義における市場の機能は、二つのさらなる特徴によって区別される。まず、市場は資本主義社会において商品生産に主要な投入物を配分するために機能する。ブルジョワ政治経済学では「生産要素」として知られているように、この投入物はもともと土地、労働、資本であった。資本主義は労働配分に市場を利用するのに加えて、不動産、資本財、原材料、信用にも市場を利用する。資本主義が市場メカニズムを通してこれらの生産的な投入物を配分する限りで、資本主義はそれらを商品へ転換する。これはピエロ・スラッファ

の印象的なフレーズで知られるように、「商品による商品の生産」のためのシステムである⁽¹⁾。ただし、このシステムは後に述べるように、背後にある非商品をよりどころにしているのであるが。

しかし、市場は資本主義社会で次の二つめの重要な機能も持っている。市場は社会の「剰余」がどのように投資されるかを決定する。マルクスの言う剰余とは、社会的エネルギーの集合的基金であり、特定の生活様式の再生産に必要な部分やその生活で使われたものの補充分を越える超過分である。社会がどのようにその超過能力を使うかは決定的に重要であり、人々がどのように生きたいか——集合的エネルギーの投資先をどのように選び、「生産的な仕事」と家庭生活や余暇やその他の活動のバランスをどのようにとるか——、さらに人々がどのように自然との関係を形成し、将来世代に何を残したいか、といった根源的な問いが提起される。資本主義社会は、このような決断を「市場の力」に委ねる。これは恐らく資本主義社会の最も重大で倒錯した特徴であり、最重要事項を貨幣価値の計算装置へ委ねることを意味する。それはわれわれの三つめの中心の特徴と密接に関連している。その特徴とは、資本の内在的で盲目的な方向性であり、資本が歴史の主体として生成し、作り手の人間を自分の召使いにする自己拡大的な過程である。

私は、この二つの市場の役割を強調することによって、資本主義は生そのものの商品化を際限なく推し進めるといって、広く流布する見解に対抗することを狙っている。私の考えでは、この見解は完全に商品化された世界という幻想の反ユートピアに行きついてしまう。そのような幻想は市場がもつ解放の側面を無視するだけではなく、資本主義は「セミ・プロレタリアート化した」家計を基礎にして作動することが多いという、イマヌエル・ウォーラーステインが強調した事実も看過することになる。そのような制度の下では、所有者は労働者に過少に支払い、多くの家計は家計維持の相当部分を貨幣賃金以外の源泉から引き出している。たとえば、自己調達（菜園、裁縫）や非公式の相互扶助（助け合い、現物取引）や政府の移転支払（福祉給付、社会サービス、公共財）などである⁽²⁾。そのような制度は活動や財の相当部分を市場の力が及ぶ範囲の外に委ねているが、資本主義以前の時代からの単なる残滓でもなければ、消滅していくものでもない。そのような制度はフォーディズムにとって極めて重要であり、中心の先進国で男性の雇用と女性の家政の結合からなるセミ・プロレタリアート化した家計を通してはじめて労働者階級の消費主義を促進することが可能になり、周辺の発展途上国では商品消費の進展を阻害してしまう。セミ・プロレタリアート化は新自由主義の下で一層顕著になってくるが、それは蓄積戦略の総体を打ち立てる際に、何十億人もの人々を公式の経済から非公式のグレイゾーンに追いやり、そこから価値を吸い上げるからである。後で述べるように、この種の「原始的蓄積」は、資本利潤を可能にする進行中の過程である。

(1) Piero Sraffa, *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge: Cambridge University Press, 1972. (ピエロ・スラフファ著、菱山泉・山下博訳『商品による商品の生産—経済理論批判序説』有斐閣、1978年)。

(2) Immanuel Wallerstein, *Historical Capitalism*, London: Verso, 1983, p.39. (イマヌエル・ウォーラーステイン著、川北稔訳『史的システムとしての資本主義』岩波書店、1985年)。

したがって、重要なのは資本主義社会の市場化された側面は、市場化されていない側面と共存しているという点である。これはたまたま事実がそうになっているという訳ではなく、資本主義のDNAに組み込まれた特徴なのである。実際、「共存」ということばは、資本主義社会の市場化された側面と市場化されていない側面の関係を捉えるには弱過ぎる。もっと適切なことばは「機能的重合性」か、あるいはもっと端的に「依存」であろう⁽³⁾。市場の存立は市場化されていない社会関係に依存し、それが可能性の基礎条件となるのである。

2 基礎的条件

これまで私は「経済的」と思われる四つの中核的特徴をもとに、かなりオーソドックスな資本主義の定義を議論してきた。私はマルクスに従って、市場交換に焦点を合わせる常識的な見方の背後を探り、生産という「隠れ家」にたどり着いた。しかし、今度は、まだ隠れているものを見出すために、その隠れ家の背後を探りたい。資本主義的生産に関するマルクスの説明は、基礎的な可能性条件の中味を埋め始めたときにのみ意味をなすと私はいいたいのである。したがって、次の問題は、このような中核的特徴が成立するためには、その背後に何が存在しなければならないか、である。マルクス自身は『資本論』第一巻の最後あたりで、いわゆる「原始的」あるいは本源的蓄積の章でこの種の問題にはじめて触れている⁽⁴⁾。どこから資本は来たのかとマルクスは問う。生産手段の私的所有がどのように存在するようになったのか、生産者はどのように生産手段から隔てられたのか。それに先立つ章でマルクスは、基礎的な可能性条件を単に所与と仮定して抽象し、資本主義の経済的論理を暴露した。しかし、資本がどこから来たのかについては、物語の前編——所有剥奪（dispossession）と収奪（expropriation）のかなり暴力的な話である——があることが後で判明する。さらに、デービッド・ハーベイが強調したように、この物語の前編は資本主義の起源に関する過去の話ではない⁽⁵⁾。収奪は、非公式ではあるが進行中の資本蓄積メカニズムであり、マルクスの物語の本編である公式の搾取のメカニズムに並行して今なお続いている。

この搾取の本編から収奪の前編への移行は、大きな認識論的転換であり、移行前のすべての議論に別の意味を与える。それはマルクスが『資本論』第一巻の初めのあたりで、市場交換の領域を立ち去ると同時に、ブルジョワの常識的な見方を捨てて、生産の隠れ家へ進み、もっと批判的な見方

(3) Karl Polanyi, *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*, New York: Beacon Press, 1957. (カール・ポランニー著、吉沢英成他訳『大転換—市場社会の形成と崩壊—』東洋経済新報社、1975年)。Nancy Fraser, “Can Society Be Commodities All the Way Down?”, *Economy and Society*, Vol.43, 2014.543-58.

(4) Karl Marx, *Capital*, Vol. 1, New York: Vintage, 1976, pp.873-6. (マルクス（岡崎次郎訳）『資本論』国民文庫第3分冊、大月書店、1972年、357-362頁）。

(5) David Harvey, *The New Imperialism*, Oxford: Oxford University Press, pp.137-82. (デヴィッド・ハーベイ著、本橋哲也訳『ニュー・インペリアルイズム』青木書店、2005年、139-182頁）。

を可能にするといったマルクスの進み方と似ている。この第一の移行の結果、蓄積は搾取を通じて行われるという汚れた秘密が明らかになる。言い換えれば、資本の拡大は、市場の見方が示すように等価交換によるのではなく、労働者の労働時間の一部を補償しないという、等価交換を正確に逆転した不等価交換によるのである。同様に、『資本論』第一巻の終わりで、搾取から収奪へ移行する際に、賃労働という高尚な強制の背後にあからさまな暴力と窃盗そのものがあるという、もっと汚れた秘密を発見する。言い換えれば、『資本論』第一巻の大部分をしめる資本主義の経済的論理の長々しい議論は最後のことばではないのである。この後に続くのが別の見方、所有剥奪の見方である。隠れ家の背後への移行は歴史への移行でもあり、私が搾取のための基礎的な可能性条件と呼んできたものへの移行でもある。

しかしながら、恐らくマルクスが資本主義の説明でほのめかしてはいるが、展開していない、同様に重大な認識論的転換がほかにもある。さらに奥の隠れ家に移るためには、一層の概念化の必要がある。21世紀の資本主義について十分に理解したいのであれば、『資本論』の続編を書く必要があろう。ひとつは生産から社会的な「再」生産——社会的紐帯を生み出し維持するような必需品の調達やケアの提供や社会的な交わり——への認識論的転換である。この活動は「ケア」や「感情労働」や「主体化」などとさまざまに呼ばれるが、資本主義の人間的主体を形成し、実体のある自然的存在として維持しながら、同時に社会的存在としても構成する。つまり、「ハビトゥス」や社会・倫理的実体である人倫（Sittlichkeit）の体系を形作る。ここで重要なのは、若者を社会化し、共同体を構築し、意味の共有や愛着や社会的協力を支えるような価値の広がりを生産し、再生産することである。資本主義社会では、すべてではないにせよ、このような活動の多くは市場の外部で、つまり家庭や近隣、学校や保育センターなどの多数の公共機関で行われる。すべてではないにせよ、その多くは賃労働の形をとっていない。だが、社会的再生産の活動は、賃労働や剰余価値の蓄積や資本主義の機能そのものにも必要不可欠である。賃労働は、家事や子育て、学校教育、愛情のこもったケアやその他の多くの活動がなければ、存在しえないであろう。そのような活動こそが、次世代の労働者を生み出し、現世代を補充し、社会的紐帯と意味の共有を形成するのである。したがって、「本源的蓄積」とおなじように、社会的再生産は資本主義的生産にとって不可欠の基礎的な可能性条件なのである。

さらに、構造的に、社会的再生産と商品生産の分割は資本主義にとって中心的な意味をもつ。実はこの分割は資本主義の所産なのである。多くのフェミニスト理論家が強調しているように、この区別は、再生産は女性に、生産は男性に結び付けられていて、深くジェンダー化している。歴史的に見れば、「生産的な」賃労働と「再生産のための」無賃金の労働への分割は、現代資本主義に特有な女性の従属の基礎となってきた。この分割は、所有者と労働者の分割と同じように、旧社会の解体に基づいている。この場合に解体されたのは、女性の仕事は男性の仕事とは区別されているが、可視的で公的に承認され、社会全体の重要な構成部分であるような社会であった。資本主義では対照的に、再生産労働は分割され、切り離された「私的な」家庭内の領域へ委ねられるが、そこでは再生産労働の社会的重要性はあいまいになる。貨幣が権力の主要な媒体となるこの新しい世界では、賃金が支払われないことが事態を隠蔽する。つまり、この仕事をする者は、

賃労働に必要な前提条件を提供しているのに、構造的に現金収入を稼いでいる者に従属している。

したがって、生産と再生産の分割は普遍的な現象であるどころか、資本主義に伴って歴史的に生じたのである。しかし、この分割は一度生じれば永久にそうだというわけではない。逆に、この分割は歴史的に形を変え、資本主義的発展の異なる局面では異なる形をとる。20世紀の間に、社会的再生産のある側面が公共サービスと公共財へ転換されたり、非・民営化されたり、商品化を免れたりした。今日、新自由主義がこれらのサービスや一部を（再）民営化したり（再）商品化したり、あるいは社会的再生産の別の側面が初めて商品化されるなど、この分割は再び形を変えつつある。さらに、公共サービスの削減を要求する一方で、同時に女性を低賃金サービス労働へ大量に勧誘することによって、商品生産と社会的再生産を分離していた以前の制度的境界を今や組み替えつつあり、この過程でジェンダー秩序を再構成しつつある。同様に重要なことだが、新自由主義は社会的再生産に大がかりな攻撃をかけて、資本蓄積の基礎条件を資本主義の危機の発火点へ転換しつつある。

3 自然と権力

しかし、われわれはさらに二つの、同様に重大な認識論的転換を考えるべきであろう。この転換で別の隠れ家に導かれるからである。その第一の転換は、資本主義が自然にただ乗りしているという物語前篇を書いているエコ社会主義者の仕事に含まれている。この物語は資本による自然の獲得（Landnahme 領土獲得）に関連しているが、これは生産「投入物」の源泉や生産廃棄物を吸収する下水溝として自然を利用する。自然はこのように資本の資源にさせられて、その価値は（ただで利用できるものとして）前提とされると同時に、（無価値なものとして）否定される。自然は資本の計算で無料と扱われて、報酬や補充なく収奪され、暗黙の内に「無限に」存在するものと想定される。このように、生命を支え自らを再生する自然の能力は、商品生産と資本蓄積の基礎条件を提供するもう一つの条件となる。

構造的に資本主義は、「原材料」を人間の横領に任せて無料で提供する自然圏と、人間によって人間のために生産された価値の領域である経済圏とをはっきりと区別するが、実際これは資本主義が始めた区別である。この区別にともなうのが、既存の区別——精神的で社会・文化的で歴史的な人間と物質的で客観的に存在し非歴史的な自然の区別——の強化である。この区別の先鋭化も、社会生活のリズムが多く の点で自然のリズムに適合していた旧世界の解体に基づいている。資本主義は人間を自然のリズムや季節のリズムから乱暴に切り離し、かれらを化石燃料で動く近代工業や化学肥料で肥大した利潤追求型農業へ徴用した。資本主義は、マルクスが「代謝の裂け目」と認識したもの、今では「人類の時代」と呼ばれるようになったものを導入したのだが、これは人間の活動が地球の生態系や大気に決定的な影響を与える、全く新しい地質学上の時代である⁽⁶⁾。

(6) Karl Marx, *Capital*, Vol.III, New York : Vintage, 1981, pp.949-50. (マルクス (岡崎次郎訳) 『資本論』国民文庫第8分冊, 大月書店, 1972年, 327- 8頁)。John Bellamy Foster, "Marx's Theory of Metabolic Rift : Classical Foundations for Environmental Sociology", *American Journal of Sociology*, vol.105, No.2, September 1999.

資本主義にともなって生じたこの分割も、資本主義が発展するにつれて形を変えてきた。現在の新自由主義の局面では、一連の新たな囲い込み（たとえば水の商品化）が始まっているが、これは「自然のさらなる部分」（この表現が適切ならば）を経済の全面にもたらすものである。同時に、新自由主義は自然と人間の境界を曖昧にすることを約束している。たとえば、新たな生殖医療技術やドナ・ハラウェイの「サイボーグ」のように⁽⁷⁾。しかしながら、このような事態の展開は自然との「宥和」を提供するどころか、資本主義による自然の商品化と併合を強める。マルクスとポラニーが論じた土地の囲い込み——既存の自然現象を「単に」市場化したに過ぎない——とは異なっており、新たな囲い込みは自然の「内部」に深く入り込み、自然の内的文法を変えてしまう。最後に、新自由主義は環境保護主義を市場化しつつある。たとえば、排出権取引や環境デリヴァティブが活発に取り交わされているが、これは、化石燃料に頼る持続不可能な生活形態を転換するために必要な、長期で大規模な投資から資本を逸らせてしまう。地球温暖化を背景にして、最後に残った生態学的コモンズ（共有地）へのこのような攻撃は、資本蓄積のための自然の条件を資本主義の危機の中心的結節点へ変えてしまう。

最後に残った主要な認識論的転換を考えてみよう。それは資本主義の政治的な実現可能性条件に関するものであり、資本主義は公的権力に基づいて資本主義を構成する規範を決めて守らせるのである。結局、資本主義は、私企業と市場交換の基礎となる法的枠組みがなければ想像することのできない。資本主義の物語の本編は、公的権力が所有権を保証し、契約を守らせ、紛争を裁定し、反資本主義的反乱を鎮圧し、資本の血液である貨幣供給の「完全な信頼と信用」（合衆国憲法のことば）を維持することに決定的に依存している。歴史的に見れば、問題の公的権力は、植民地支配の国家を含む領域国家に宿ることが多かった。公的権力はそのような国家の法制度であり、それが表面的には非政治的な競技場を確立して、私的主体があからさまな政治的干渉や血縁関係のえこひいきを免れた「経済的な」利害を追求することができる。同様に、領域国家こそが「正統な強制力」を動員して、資本主義的所有関係の起源でもあり、それを維持してきた収奪に対する抵抗を打ち破ることができたのである。最後に、そのような国家が貨幣を国有化し保証する⁽⁸⁾。歴史的には、国家が資本主義経済を「構成した」と言って差し支えないであろう。

ここで、われわれは資本主義社会を構成するもう一つの構造的分割にぶつかる。それは政治と経済の分割である。この分割に伴うのが、公的権力と私的権力、政治的強制と経済的強制の間の制度的区別である。これまで論じてきた他の中核となる分割と同様に、この分割も以前の社会の解体の結果として生じた。今度の場合には、解体されたのは、経済的権力と政治権力が事実上一体化していた社会であり、たとえば、封建社会のように労働、土地、軍事力の支配が領主と臣下という単一の制度の下で行われた社会である。エレン・ウッドが巧みに論じたように、資本主義社会では対照的に、経済権力と政治権力は切り離され、両者はそれぞれ別の領域や媒体や運用法をもってい

(7) Donna Haraway, "A Cyborg Manifesto : Science, Technology and Socialist-Feminism in the Late Twentieth Century", *Socialist Review* 80, 1985.

(8) Geoffrey Ingham, *The Nature of Money : New Direction in Political Economy*, Cambridge : Polity Press, 2004. David Graeber, *Debt : The First 5,000 Years*, New York : Melville House Publishing.

る⁽⁹⁾。しかし、資本主義の本編の物語には地政学的レベルでも政治的な実現可能性の条件がある。ここで問題にしているのは、領域国家が埋め込まれている、より広い空間の組織化である。これは、拡張主義的傾向をもつ資本が極めて容易に移動することができる空間である。しかし、国境を越えて活動する資本の能力は、国際法や大国間の取り決めや（自然状態と想定されることが多い領域を資本に有利な方法で部分的に鎮静化するような）超国家的なレジームに依存している。歴史を通じて、資本主義の物語の本編は、一連のグローバルな覇権国家の軍事的・組織的能力に依存してきた。ジョバンニ・アリギが論じるように、グローバルな覇権国家は、多国家システムの枠組みのなかで資本蓄積を次々に拡大するようになってきた⁽¹⁰⁾。

ここで、資本主義社会を構成するさらなる構造的分割を見出す。これは、国内と国際の間の「ウェストファリア的」分割と中心と周辺の間で帝国主義的分割であり、両者ともより根源的な分割に基づいている。根源的な分割とは、「世界システム」として組織されるようなグローバル化を進める資本主義経済と領域国家の国際制度として組織される政治的世界の間の分割である。国家レベルでも地政学的レベルでも、いまだ資本が歴史的に依存してきた政治的能力を新自由主義が空洞化しつつある現在、これらの分割もまたその姿を変えつつある。この空洞化の結果、資本主義の政治的な可能性条件は資本主義の危機が生じる場ともなり、発火点ともなる。これらの個別論点について詳しく議論することもできようが、私の主張の大筋は明らかであろう。資本主義を説明する際に、私はまず前景となる「経済」の特徴が「非経済」の基礎条件に依存していることを示した。私的所有、自己拡大する価値の蓄積、自由労働市場や商品生産のための他の主要な投入物市場、それに社会的剰余の市場配分等で定義される経済システムが成立しうるのは、決定的に重要な三つの基礎的条件——社会的再生産、地球のエコロジー、政治権力——があるからである。資本主義を理解するためには、したがって、本編の物語をこの三者の前篇の物語に関連させる必要がある。マルクスの視野をフェミニスト的な視野、エコ経済的視野、政治的・理論的視野（国家理論、コロニアル・ポストコロニアル、トランスナショナル）へ結びつけなければならない。

4 制度化された社会秩序

この説明によれば、資本主義とはどんな種類の動物なのか。本稿で議論してきた構図は、資本主義とは経済的システムであるという聞きなれた考えとは重要な点で異なる。われわれが確認した資本主義の中核的特徴は「経済的」であるかのように見えるかもしれない。これは認めよう。だが、外観は人を誤らせる。資本主義の特異性のひとつに、それが社会関係の基本構造を「経済的」であるかのように扱うという点がある。実際、われわれに直ぐに分かったのは、そのような「経済」システムが存在するためには「非経済的な」基礎条件について議論する必要があるということだった。

(9) Ellen Merkins Wood, *Empire of Capital*, London and New York : Verso Books, 2003.

(10) Giovanni Arrighi, *The Long Twentieth Century : Money, Power and the Origins of Our Times*, London and New York : Verso Books, 1994. (ジョバンニ・アリギ著、土佐弘之他訳『長い20世紀—資本、権力、そして現代の系譜』作品社、2009年)。

これらの基礎条件は資本主義経済の特徴ではなく、資本主義「社会」の特徴であり、基礎条件は構図から消去してはならないし、資本主義理解のために概念化し理論化しなければならないという結論に至った。つまり、資本主義とは経済より大きいものなのだ。

同様に、私が素描してきた構図は、資本主義は倫理的生活の物象化された形態であり、倒錯した商品化と貨幣化で特徴づけられるといった見方とも異なる。この見方は、ルカーチの著名なエッセイ「物象化とプロレタリアートの意識」で明確化されたものであり、商品形態は生活のすべてを植民地化し、法、科学、道徳、芸術、文化などのさまざまな現象に商品の刻印をおしていくものであると主張する⁽¹¹⁾。私の考えでは、商品化は資本主義社会でも普遍的現象であるところか、その反対に、商品化そのものは非商品化に依存する。社会的、生態的、政治的な、このような非商品化の領域は、単に商品の論理を反映するだけではなく、その領域自身の規範的・存在論的文法を具体的に表現する。たとえば、(生産のための慣行とは反対に)再生産のための社会的慣行は、どんなに階層序列的で偏狭なものであろうとも、ケアや相互の責任や連帯という理想を生じさせる傾向がある⁽¹²⁾。同様に、政治のための慣行は、経済のための慣行とは反対に、どんなに制約的で排外的であらうとも、民主主義や公共的自律性や集団的自己決定の原則に関連をもつことが多い。最後に、人間以外の自然における資本主義の基礎的条件に関連する慣行は、どんなに非現実的で党派的であらうとも、生態学的な管理責任や自然支配の否定や世代間の正義を涵養する傾向がある。もちろん、私の主張はこのような「非経済的な」規範性を理想化することにあるのではなく、資本主義の前景にある価値——とくに、成長、効率性、等価交換、個人の選択、(他からの干渉がないという意味の)消極的自由、それに能力主義的な社会的昇進など——からの乖離を確認することにある。

この乖離こそ、資本主義を概念化する際に極めて重要になってくる。資本主義社会は、単一の、すべてを包含するような物象化を生み出すどころか、異なる規範に従って差異化され、互いに相違するが関連する複数の社会的存在論を包含する。これらの存在論が衝突する時に何が起きるかは、今後の課題であるが、その基礎にある構造はすでに明らかである。つまり、資本主義に特有の規範の配置は、われわれが確認した前景と背景(基礎的条件)の関係から生じる。その配置の批判理論を展開するためには、資本主義を倫理的生活の物象化形態とする見方をやめて、差異化と構造の視点をとらなければならない。

資本主義が経済システムでもなく、倫理的生活の物象化形態でもないとする、それはなんであろうか。私の答えは、資本主義はたとえば封建主義と比較できるような、制度化された社会秩序と考えるのが相応しいというものである。このように資本主義を理解すれば、その構造的分割、特に

(11) Georg Lukacs, *History and Class Consciousness: Studies in Marxist Dialectics*, London: MIT Press, 1971. (ジェルジ・ルカーチ著、城塚登・吉田光訳『歴史と階級意識』白水社、1975年)。

(12) Sara Ruddick, *Maternal Thinking: Towards a Politics of Peace*, London: Ballantine Book, 1990. Joan Trento, *Moral Boundaries: A Political for an Ethics of Care*, New York: Routledge, 1993.

私が確認してきた制度的分離がよくわかる。すでに見たように、資本主義を構成するのは、「経済的生産」の「社会的再生産」からの制度的分離であり、ジェンダー化された分離である。この分離は資本主義特有の男性支配の基礎にあると同時に、労働力の資本主義的搾取を可能にして公的に承認された蓄積様式も可能にする。資本主義に決定的に重要なのは「経済」の「政治」からの制度的分離であり、それは「経済的」と定義されるものを領域国家の政治的課題から追放し、資本が自由に国境を越えた無人地帯をうろつきまわり、政治的管理を逃れながら覇権秩序から利益を得ることを可能にする。最後に、同様に資本主義に根本的に重要なのは、（人間以外の）「自然の」背景（基礎条件）と（表面的には非自然の）「人間的な」前景の間にある存在論的分割であり、すでにある分割が資本主義によって大きく拡大するのである。したがって、資本主義はそのような分離に基づいた、制度化された社会秩序であるとすれば、資本主義はジェンダー抑圧と政治的支配——国家的かつ超国家的支配、コロニアルかつポストコロニアルな支配——と生態学的廃頹を構造的に重層化するものと理解することになる。もちろん、これは労働の搾取という同様に構造的な前景と結びついているのであるが。

こう言ったからといって、資本主義の制度的分割は一度決まれば永久に変わらないというものではない。逆に、すでに見たように、正確にどこで、いつ、資本主義社会は生産と再生産の間に、経済と政治の間に、人間と人間以外の自然の間に線を引いたかは、蓄積レジームに応じて歴史的に変わっていく。実際、正確にこのような方法で、競争的自由放任資本主義と国家独占資本主義とグローバル化した新自由主義の資本主義を概念化することができる。これらは、経済を政治から、生産を再生産から、人間を人間以外の自然から区分する、歴史的に特定化できる三つの方法なのである。

5 境界闘争

同様に重要なことであるが、どこでも、いつでも、資本主義的秩序の正確な配列は政治に——社会的権力の均衡と社会的闘争の結果に——依存している。資本主義の制度的分割は単に所与であるのではなく、紛争の焦点になることがよくあり、経済を政治から、生産を再生産から、人間を自然から分離するために設定された境界に挑戦したり、それを擁護するために人々が動員される。抗争の焦点となる過程を資本主義の制度的地図の中に再配置しようとすれば、その限りで資本主義の主体はわれわれが確認したさまざまな領域に結びついた規範的視点に依存することになる。これが、今日われわれの眼前で生じている事態である。たとえば、新自由主義に反対する者のなかには、教育の商品化に反対するために、再生産に結びついたケアや連帯や相互責任の理想に依拠しようとする者がいる。再生可能エネルギーへの転換を目標に戦うために、エコロジーとむすびついた自然管理の理念や世代間正義に訴える者もいる。さらに、国際資本移動を制御し、国家を越えて民主的な説明責任を広めるために、政治に結びついた公共的自律性の理想を喚起する者もいる。このような主張とそれに反対する主張は、資本主義社会の社会闘争の素材そのものであり、それはマルクスが特別視した、商品生産の支配と剰余価値の分配をめぐる階級闘争と同様に根本的なものである。こ

のような闘争を境界闘争と呼ぼうと思うが、それは資本主義社会の構造を決定的に形作る⁽¹³⁾。これらの闘争は、資本主義を制度化された社会秩序とする見方を形成する際に重要な役割を演ずる。

境界闘争に焦点を当てるといっても、私が素描してきた見解が機能主義であるという誤解は避けなければならない。確かに私は、再生産やエコロジーや政治権力を資本主義経済の物語本編に必要な基礎的条件として特徴づけ、商品生産と労働の搾取と資本蓄積の機能性を強調した。これは認めなければならない。しかし、この構造的契機は、資本主義の前景・背景関係をすべて物語るわけではない。この構造的契機は、むしろすでに示唆しておいた別の「契機」と共存するが、同様に重要なその別の契機とは、「非経済的な」規範性の貯蔵庫として社会的、政治的、生態学的なものを特徴づける際に浮かび上がってきたものである。つまり、これらの「非経済的な」秩序が商品生産を可能にするが、それらの意味は機能の促進に還元することはできない。これらの隠れ家は、蓄積のエネルギーによって完全に枯渇したり、それに全面的に従属するどころか、それぞれ社会的慣行と規範的理想に関する特有の存在論の住処となる。

さらに、これらの「非経済的な」理想は批判的・政治的な可能性を孕んでいる。特に、危機の時代に、これらの理想は資本蓄積に結びついた中核となる経済慣行に対抗することができる。そのような時代には、さまざまな規範性をそれらの固有の制度的領域へ分離することに通常用いられる構造的分割が弱められる傾向を示す。分離が行われなくなると、資本主義の主体は、結局、複数の領域で生きているのであるから、規範の衝突を経験する。資本主義の主体は、理想を「外部」から持ち込むのではなく、資本主義批判のために資本主義自体の複雑な規範性に依拠し、前景・背景の分割に基づいた制度化された社会秩序のなかで、時には不安に満ちて、共存する複数の理想を木目に逆らうように動員する。このように、資本主義を制度化された社会秩序と見れば、内側からの資本主義批判が可能になることが分かる。

しかし、このように見ることで、社会や政治や自然をロマンティックに、つまり資本主義の「外部に」あって本質的に反資本主義的であると理解するのも誤りであることがわかる。このロマンティックな見方は今日、かなり多数の反資本主義の思想家や左翼活動家が抱いているもので、文化フェミニスト、ディープ・エコロジーを奉じる者、ネオ・アナーキストも含まれるし、さらに「複数経済」、「ポスト成長経済」、「連帯経済」、「ポピュラー・エコノミー」等を主張する多くの人々も含まれる。残念ながら、これらの潮流は「ケア」や「自然」や「直接行動」や「コモンズ化」を本質的に反資本主義的であると捉えることが多い。その結果、かれらのお気に入りの慣行が批判の源泉であるだけでなく、資本主義的秩序に不可分の部分であることを見過ごしてしまう。むしろここでは、社会、政治、自然は経済と同時に生起したものであり、経済と共生関係にあると論じたい。社会、政治、自然は経済の「他者」であり、経済への対照においてそれぞれの特徴を獲得している

(13) Nancy Fraser, "Struggle over Needs: Outline of a Socialist-Feminist Critical Theory of Late-Capitalist Politics Culture", in Fraser, *Unruly Practices: Power, Discourse and Gender in Contemporary Social Theory*, Minneapolis and London: Polity, 1989.

に過ぎない。したがって、再生産と生産は対をなし、互いに他者によって同時に定義されることになる。両者とも相手がなければ意味をなさない。同じことが政治と経済の対や自然と人間の対に関しても成立する。資本主義的秩序の核心とは、「非経済的」領域のいずれも、完全に純粋で全面的にラディカルな形の批判を保証するような完全に外部の観点を提供できないという点である。逆に、資本主義の「外部」と想像されるものに訴えて行われる政治的事業は、男性の攻撃に対する女性のいつくしみ、経済計算に対する自発的協力、人間中心主義的個人主義に対する自然の全体的有機性など、資本主義の陳腐な定型をもたらして終わることが普通である。闘争をこのような対立に基づいて行うことは、資本主義社会の制度化された社会秩序に挑戦することにはならず、それを知らず知らずの内に反映してしまうことになる。

6 矛盾

したがって、資本主義の前景・背景関係を適切に説明するためには三つの考えを組み合わせなければならない。第一に、資本主義の「非経済的な」領域は経済の基礎条件を支えることに役立つ。後者の存立は前者から生まれる価値と投入に依存する。第二に、しかしながら、資本主義の「非経済的な」領域はそれ自身の意味と特徴をもち、状況次第では反資本主義闘争に役立つこともある。しかし、第三に、これらの領域は資本主義社会の核心であり、歴史的に見れば、経済領域と同時に構成され、経済との共生関係にあるという特徴をもつ。

第四の考えもある。初めに提起した危機の問題に戻ろう。資本主義の前景・背景関係には社会的不安定性の原因が組み込まれている。すでに見たように、資本主義的生産は自分を支えることができないので、社会的再生産や自然や政治的権力にただ乗りする。しかし、際限なく蓄積しようとする資本主義の傾向はこれらの可能性条件そのものを不安定化させる。生態学的条件の場合に危険に曝されているのは、生命を維持し、社会的調達に物質的投入物を提供する自然過程である。社会的再生産条件の場合に危険に瀕しているのは、社会的協力を支える連帯関係や愛着や価値の広がりを生み出し、適切に社会化され熟練した人間を「労働」を構成するように供給する社会的・文化的過程である。資本主義の政治的条件の場合に危うい状況に陥っているのは、所有権を保証し、契約を守らせ、紛争を裁定し、反資本主義の反乱を鎮圧し、貨幣供給を独占する、国内と国際的政治権力である。

マルクスのことばでは、ここに三つの「資本主義の矛盾」がある。生態学的矛盾、社会的矛盾、政治的矛盾であり、それぞれ三つの「危機の傾向」に対応する。しかしながら、マルクスが強調した危機の傾向とは異なり、三つの危機は資本主義経済に内在する矛盾から生じるのではない。むしろ、それらは経済システムとその可能性の基礎条件の間の矛盾——つまり経済と社会の矛盾、経済と自然の矛盾、経済と政治の矛盾——に根差している⁽¹⁴⁾。すでに見たように、矛盾の結果として資

(14) See James O'Connor, "Capitalism, Nature, Socialism: A Theoretical Introduction", *Capitalism, Nature, Socialism*, vol. 1, No. 1, 1988, pp. 1-22.

本主義社会で広範な社会的闘争が引き起される。生産点における階級闘争だけでなく、エコロジーや社会的生産や政治的権力をめぐる境界闘争が引き起こされる。このような闘争は、資本主義社会に内在する危機の傾向への反応であるが、より広く資本主義を制度化された社会秩序とする見方にとって特有のものである。

本稿で素描された概念で、どのような種類の資本主義批判ができるであろうか。資本主義を制度化された社会秩序とすれば、マルクスが『資本論』で展開したのと同じような複線的な批判的考察が必要となる。私の読み方では、マルクスは三つの批判——資本主義に内在する（経済的）危機の傾向のシステム批判、（階級）支配に組み込まれた動態の規範的批判、（階級）闘争に特徴的な形に内在する解放の契機をもつ社会的転換のポテンシャルの政治的批判——を織りあわせたのである。私がここで輪郭を描いた見方は、批判的な論理の糸を同様に織りあわせたものであるが、それぞれの論理の糸が複線的なので、本稿の織り方はもっと複雑なものになる。システム危機の批判は、マルクスが論じた経済的矛盾だけでなく、いままで論じてきた三つの領域間の矛盾も含む。この領域間の矛盾は、社会的再生産やエコロジーや政治権力を危険に曝すことによって、資本蓄積に必要な基礎条件を不安定化させることになる。同様に、支配の批判はマルクスが分析した階級支配関係だけでなく、ジェンダー支配、政治的支配、自然支配も含む。最後に、政治的批判は複数の種類の主体——階級、ジェンダー、身分集団、国家、民衆、そしておそらくは種も——と複数の方向性をもつ闘争——階級闘争だけでなく、社会と政治と自然が経済から分離される際の境界闘争も——も含む。

反資本主義闘争で重要なのは、したがって、マルクス主義が伝統的に想定してきたものよりずっと広い。物語の本編の背後にある前篇を見れば、直ちに労働搾取に不可欠な基礎条件のすべてが資本主義社会の闘争の焦点になることが分かる。生産点における労働と資本の闘争だけでなく、ジェンダー支配、エコロジー、帝国主義、民主主義をめぐる境界闘争もある。しかし同様に重要であるが、後者は今や新たな姿で現れる——資本主義のなかの闘争、資本主義をめぐる闘争、そして場合によっては資本主義そのものへの闘争として。これらの闘争が上で述べてきたような自己理解に至れば、おそらくは協力したり、団結することもできるであろう。

(Nancy Fraser New School for Social Research)

(翻訳者：たけだ・きょうこ 一橋大学大学院経済学研究科修士課程)